



マリyam・サイドさん

Mariam C. Said

レバノン生まれ。ペイルートのアメリカン大学を卒業後、渡米。コロンビア大学に入学し、経営学修士(MBA)を修得。1970年にエドワード・サイドと結婚。一男一女をもうける。銀行家としてのキャリアを積みながら、公私ともにエドワードを支える。エドワードが他界した2003年以降、彼の意志を継ぎ、バレンボイム・サイド基金の理事としてパレスチナ西岸地区の音楽教育の発展につとめている。また、イスラエルとパレスチナの若手音楽家の交流プロジェクトにも関わっている。

パレスチナ問題の世界的な論客である、故エドワード・サイド。彼が遺した数々の著作や発言に影響を受けている人は多い。晩年、死を予感した彼が著した自伝をモチーフに、日本でドキュメンタリー映画がつくられた。その映画が描くのは、アイデンティティーについて考察する彼の姿だ。『あるべきところから外れ、彷徨い続けるのがよい』——そういう境地に至った彼の気持ちはどのようなものだったのだろうか。彼を支え続けてきた、妻のマリアムさんの話を聞くことで、新たな視点から、アイデンティティーというものを考えるきっかけにしていきたい。

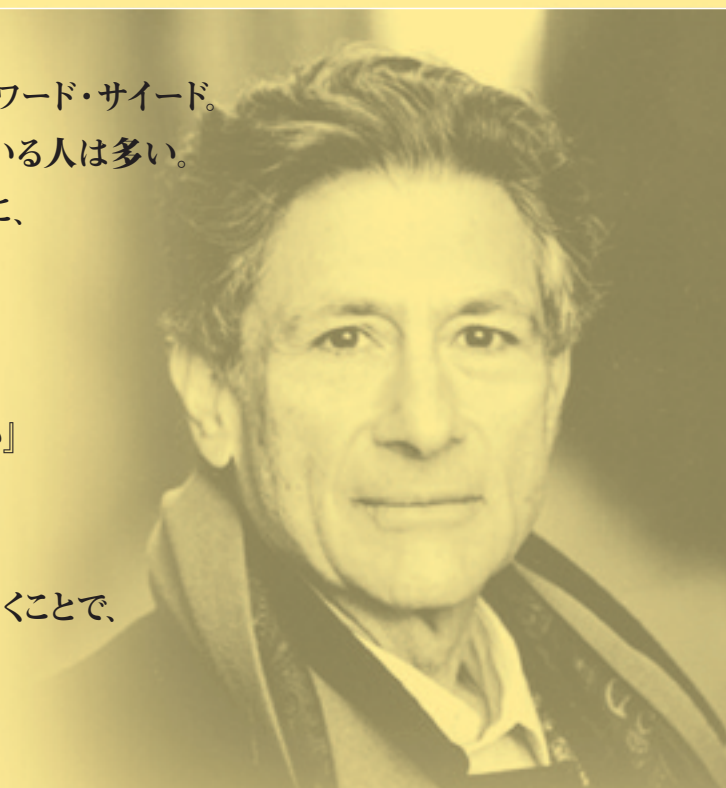
パレスチナの青年とレバノンの女性 異邦人同士の出会い

「彼と初めて会ったのは、ニューヨークの病院の一室でした。彼の妹が腰を痛めて入院していたんです。彼女とは大学でクラスメートでしたから、お見舞いに行ったところ、そこにいたのが彼でした」

「彼」の名は、エドワード・サイド(※1)。のちにパレスチナ出身の知識人として、西欧の帝国主義政策や、イスラエルの動向に異を唱え、国際的な発言力を持つようになる。だが、マリアムさんが会ったときのエドワード・サイドは、まだ普通の大学生だった。

※1 エドワード・サイド

1935年、エルサレムに生まれる。47年にイスラエル建国のため、生家を追われカイロに移住。15歳で渡米し、コロンビア大学で英文学と比較文学の教授となる。文学批評家として世界的に知られる一方、パレスチナ問題の代表的な論客として活躍し、パレスチナ民族評議会の一員となり、パレスチナ人の権利のために闘う。主な著書に『オリエンタリズム』(1978年)、『パレスチナとは何か』(1986年)、『文化と帝国主義』(1993年～2001年)などがある。ピアニストとしても知られており、音楽評論をまとめた『音楽のエラボレーション』(1991年)などを著す。また、イスラエル人の指揮者ダニエル・バレンボイムと共に、イスラエルとパレスチナの音楽家を集めて演奏活動を続けた。2003年、闘病生活の末、ニューヨークで没する。



「病院で会ったときは、ほんと、すれ違っただけという感じでした。ですから、本当の意味でエドワードと出会ったと言えるのは、その1年後です。彼の妹と映画を見にいったんですが、そのときに彼も来たんですね。そのうち彼とつき合うようになって、デートを重ねていくうちに、お互い惹かれていったというか…」

夫との馴れ初めを話すのは苦手だ、と笑うマリアムさん。彼女は、夫・エドワードの出自と経歴を追ったドキュメンタリー映画、『エドワード・サイドOUT OF PLACE』の公開に合わせて来日した。残念ながら、彼女の隣に夫はいない。彼は2003年、白血病で帰らぬ人となった。

レバノン出身のマリアムさんは、少し照れくさそうに、パレスチナ人であったエドワード・サイドとの結婚について、話を続けてくれた。

「アラブの国々は、共通するところもありますが、相違点も非常に多いんです。幸い、パレスチナは、レバノンと地域文化的に同じグループに属していました。グループ内の国の間では、交流が盛んですから、パレスチナ出身のエドワードとは、それほどギャップはありませんでした。どちらの家族もプロテスタントだったのも大きいですね。私たちは、西洋人の宣教師に大きな影響を受けていたから、結婚に関してそれほど障害はなかったと思います」

2003年に亡くなったエドワード・サイドの人生をたどりながら、現在のパレスチナ、イスラエル、レバノン、シリア、エジプト、そしてニューヨークを旅するロードムービー。マリyamさんを始めとする親族や、言語学者のノーム・チョムスキー、指揮者のダニエル・バレンボイム、パレスチナ系イスラエル国会議員のアズミ・ビシャーラなど、彼と縁の深い関係者のインタビューも多数収録されている。監督は、『阿賀に生きる』などで知られるドキュメンタリー作家の佐藤真。



梅田ガーデンシネマ、京都シネマ他にて今夏公開予定
公式サイト ■ <http://www.cine.co.jp/said/>

異邦人としての自分
西洋とアラブの狭間で

1935年、イギリス委任統治下の西エルサレムで生まれたエドワード・サイドは、47年、イスラエル軍に追われ家族と共にエジプトに移住。生家のあった西エルサレムは、翌年イスラエルに占領された。以降彼は、自分がどの国で暮らそうと、「異邦人」であることを常に意識させられることになる。

「彼は、エジプトに長く住まなかつたので、根を下ろすことができなかつたんです。そして15歳で両親の元を離れてアメリカの寄宿舎制の高校に入りました。親がいないので、アメリカに根を張ることもできませんでした」

パレスチナ。エジプト。そしてアメリカ。めまぐるしく変わる環境の中で、エドワード・サイドはアイデンティティーを確立できなまま、アメリカに帰化し、プリンストンとハーバードの二つの大学で学位を取得。そして、コロンビア大学で、英文学と比較文学の教授の職を長年勤めることになる。

「私と結婚した頃、エドワードは比較文学などの論文を書くことはありましたが、もっと大きなテーマで本を書くことはありませんでした。しかし、彼は、1967年の第三次中東戦争(※2)で、アラブ諸国がイスラエルに徹底的に叩かれたことが大きなトラウマになったんです。これは彼だけではなく、アラブ人全体にとっても大きな痛手だったのですが。」

エドワードは、アラブの視点から見てあの戦争が何だったのか、いったい何が起こったのか、分析したいと思っていました」

エドワード・サイドは、「マリyamと結婚したことで、アラブ世界と再びつながることができた」と発言している。

「アラブ人としての視点で、エドワードと話ができたのが良かったと思います。結婚してから1年間、私が生まれたレバノンで生活もしました。さらに、彼はそこでアラブ語も勉強し直したんです。アラブとの関係を取り戻そうとしていたのでしょう」

根無し草であること
彷徨い続けることの意義

アメリカへの帰化とアラブへの帰還。エドワード・サイドは、西洋とアラブの狭間で悩みながら、そうした自分を肯定的に捉えるようになる。

「エドワードは根無し草でした。そのおかげで、根っこのある人の視点とは異なる見方ができるようになりました。まず、西洋人の言葉を使い、西洋人の思考回路にぴったり来る形で、アラブ人の誇りや考え方を初めて発表したのです。さらに、パレスチナの問題を、第三世界の他の地域の紛争に当てはめて考えたのです。これは、他の誰にもできなかったことです」

エドワード・サイドの自伝『遠い場所の記憶』(原題:OUT OF PLACE)にこのようなくだりがある。『あるべきところから外れ、彷徨い続けるのがよい。けっして本拠地など持たず、どのような場所にあっても自分の住まいにいるような気持ちはもちすぎないほうがよいのだ』と。マリyamさんは、この言葉に説明を加えてくれた。

「ひとつの社会、ひとつの国で生まれ育つと、そこで一定のことを教えられて、それを信じ、物事を見るようになります。時に疑問を持つことはあっても、結局はその社会で心地よく生きていくために、そうした疑問を捨て、同化してしまいます。」

ですけれど、根っこを引き抜かれて、別のところに放り投げられると、今まで自分が教わってきたものに疑問を持つようになります。同時に、周りの人々が当たり前だと思っていることに対して、違う視点から意見を述べるができるようになるんですね」

さまざまな視点を得ることで
ポジティブな気持ちになっていく

マリyamさん自身も、アイデンティティーに苦しむことは、それほど悪いことではないと語る。

「自分の居場所だと感じるの、やはりレバノン

です。ですけれど、今はアメリカに住んでいますし、これまでの人生の中でいちばん長く住んでいるところですよ。だからといって、自分はアメリカに属しているとは思えません。その中途半端な感じが、私にはポジティブなことにつながるのです。

たとえば、こういうことがありました。1950年代初頭に、レバノンの女性が投票権を得るための運動が起こったんです。私の母はこの運動に非常に熱心に関わっていました。結局、投票権は得たんですが、女性の地位向上のために、もっと運動していこうという気運が盛り上がったんですね。そこで相続法を変えようという案が出てきました。それまで女性は、男性の半分しか相続できませんでした。その不平等を解消するための運動だったのです。

そこである案が出てきました。それは、レバノン国内のイスラム教徒とそれ以外の教徒を分けて考えることでした。なぜかという、イスラムでは男女平等が禁じられていたが、他の宗教ではそういう禁止事項がなかったからです。ですから、イスラム教徒以外の女性のために運動したほうが、効率が良いと思ったようです。最初の目標が達成できたら、次のステップとしてイスラム教徒の女性の権利のために闘おうとしたわけです」

そうした状況の中、マリyamさんはアメリカに渡る。すると、彼女の中に、別の視点が開けてきたという。

「アメリカの女性人権の運動家に話を聞いたんです。そうしたら、『ふたつのグループに分けるなんてとんでもない。そんなことをすると、すべての女性にとっての解決にならないから、最初から女性全体を考えて動くべきだ』と言われました。もし私がレバノンにいたら、ふたつのグループに分けるのは仕方ないと思ひこんで

いたはずですよ。しかし、アメリカに住むことによって、異なる考え方に触れることができました。それは非常にポジティブなことなのではないでしょうか」

アイデンティティーが不明確なことが、逆にさまざまな視点から物事を考える訓練になる。マリyamさんの体験談は、エドワード・サイドの思想に説得力を持たせてくれる。

「エドワードはよく私に言っていました。私は彼の『鑑』だと。どういうことかという、彼は、さまざまなことに興味がありすぎて、方向性を見失いそうなときに、私がいることで、落ち着いて物事を考えることができたからです」

それは日本で言う『内助の功』のようなものだろうか。

「そうかもしれません。私のもとに帰ってくることで、エドワードの考えがどんどん固まって、形になっていったと思います」

パレスチナの代表的な知識人であるエドワード・サイド。その偉大な思想、そして著作の数々は、けっして彼ひとりで作上げたものではないということがうかがえる。マリyamさんの確信に満ちた言葉を心に留めて、彼の遺した思想を見つめ直してみよう。アイデンティティーに苦しむ人も、少し視点を変えることで、新たな発見があるかもしれない。

Text by : 植田マサユキ

※2 第三次中東戦争

シリアのゴラン高原におけるユダヤ人入植地をめぐる、イスラエルとアラブ諸国で緊張が高まった1967年、イスラエルはエジプトを奇襲攻撃。制空権を握り、ヨルダン川西岸地区、ガザ地区、シナイ半島を制圧。イスラエルはそれまでの領土を一挙に4倍に増やした。



エドワード・サイド
OUT OF PLACE

佐藤真監督の制作ノートに加え、本編ではカットされたインタビューを完全収録したガイドブック。
みすず書房
2,000円＋税



遠い場所の記憶 自伝
白血病を宣告されたエドワード・サイドが、エルサレム、カイロ、レバノンで家族と共に過ごした日々を回顧する。
みすず書房
4,300円＋税



ペンと剣

自著や、パレスチナ問題について、ラジオ番組のインタビューに応えたエドワード・サイドの発言集。
ちくま学芸文庫
1,200円＋税